

クモガタヒョウモンとの出会いは、1958年7月、青柳中学校1年の時に理科担当の故岡本盛康先生に引率いただいて高知市内から遠征した、海拔1400mの昆虫の宝庫といわれた梶が森だ。便利なザック類が簡単に買えるような時代ではなく、薄手の毛布に新聞紙、缶詰などを入れた母手製のリュックを背負い、山頂まで6.4kmという山登りも初体験だった。海拔800m辺りにある仏嶽寺が自炊を条件に宿泊させてくれるところで、板張りの部屋に雑魚寝状態。新聞紙は、朝方の冷え込みに対して背中に挟み込めば確実に保温効果があると岡本先生が教えてくれたノウハウ用だ。クモガタヒョウモンは、豊永駅からの登山道を1kmほど上った人家が点在する辺りで、ウツギの花蜜を求めて集まっていたアカタテハ、キタテハ、イチモンジチョウ、サカハチ

チョウ、ミドリヒョウモン、メスグロヒョウモンなどに混じる本種を見たのが初の出会いだが、手元にある唯一の標本は4年後に蝶仲間と登山した際に同じ場所で採集した個体である。この



June 18, 1962 高知梶が森 表面

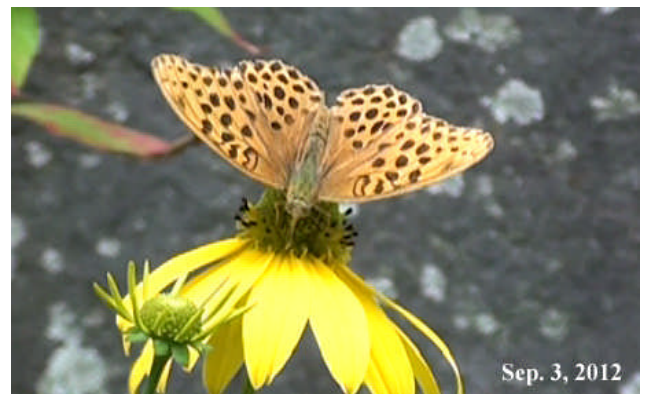


June 18, 1962 高知梶が森 裏面

辺りを5月に訪れると、白い鱗粉が目立つことで四国産亜種とされるウスバアゲハが飛び交い、人家石垣に自生するツメレンゲ周りにはクロツバメシジミも見られたが、50年以上経った現在も継続発生しているかどうか分からない。

日本産ヒョウモンチョウ類の和名は、特徴の少ないヒョウモン=豹紋の並ぶ翅表ではなく、裏面の特征にもとづく命名が多く、本種は後翅裏面の漠として表現しにくい色調を雲形と命名したものだ。緑の色調が濃い帯模様があるのはミドリヒョウモン、褐色帯に銀色の紋が映えて美しいのはウラギンヒョウモン、銀紋がことさら美しいのはギンボシヒョウモン、褐色帯に白い筋模様があればウラギンスジヒョウモンで、それに酷似するやや大型の種はオオウラギンスジヒョウモンと、いい得て妙なる和名がつけられている。白水博士の標準図鑑には北海道から九州、佐渡島、壱岐、対馬などと分布は広いがどの産地でも個体数が少ないと記され、加古川市では1983年5-6月の観察記録以降、発生が途絶えている。

クモガタヒョウモンは、どこそこに行けば必ず会えるというような種ではなく、長く自然状態の撮影記録が撮れずにいたが、2012年9月、標高約1600mの信州八千穂高原で、クジャクチョウなどと一緒にキク科オオハンゴンソウの黄色い花の蜜を求めてやってきた個体をようやく撮影できた。すでに記録できている種でも技術の進歩でさらに高精細画像として再度撮影記録したい種が多く残



Sep. 3, 2012

る状況でチョウとの付き合いにはいつまでも終わりがなく、マイナスイオンに満ちた自然の中で走り回って過ごすひとは楽しく、健康にもすこぶるいい。